

地域生活を送る精神疾患を有する人を対象とした日常生活におけるニーズ評価尺度

(Camberwell Assessment of Need-Clinical version : CAN-C) 日本語版の開発と信頼性妥当性の検証

研究代表者 大竹 文 (東京医科歯科大学大学院 大学院生)

指導教員 森田 久美子 (東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科 准教授)

研究要旨

目的:精神疾患を有する人が、地域生活を送る上で必要な基本的なニーズのアセスメントをする評価尺度である Camberwell Assessment of Need-Clinical version (以下 CAN-C と表記) は当事者と支援者の各々がニーズの評価を行う。その評価を元に必要な支援について話し合うことで、支援者の客観的な評価による支援だけでなく、当事者による主観的なニーズを取り込み、当事者が主体的に自分自身の支援の決定にかかわっていけるツールとなる。今回、この CAN-C の日本語版の開発と信頼性妥当性を検証することを目的とした。

方法:原著者の許可を得て CAN-C を和訳し、研究者間で検証した後に逆翻訳をして原著者へ内容に原版との相違がないかを確認した。そののちに CAN-C の日本語版を用い、精神看護にかかわる看護師 53 名が紙面上の架空の事例で CAN-C の評価方法と評価段階を自己学習し、その後別の事例で評価した。また、評価後に CAN-C についてのアンケートを行った。さらに、その中でランダムに選ばれた 20 名は 1 週間以上の期間をあげ、同じ事例を再評価した。

結果:Cronbach α 係数はサービス利用者の自己評価は 0.719、支援者から見たニーズ評価は 0.787 であった。再テスト法による相関係数を分析し、過半数で 0.5 から 0.8 程度の値が得られ、一定程度の相関が見られた。また、研究参加者の属性を、精神看護経験年数、性別、訪問看護ステーションもしくは精神科病院の施設別に分類し、その正解率について検討したところ、属性による有意差はなかったことが確かめられた。

考察:信頼性検討として Cronbach α 係数からは CAN-C に尺度としての一定の信頼性があることが確かめられた。一方で相関係数には幅があり、一定の相関はあると考えられるものの必ずしも評価者内信頼性が高いとは言えなかった。今回は紙面上の事例による検討のため評価者間信頼性の検討には限界が見られたが、自己学習する上で考慮すべき点について示唆を得た。また、使用後のアンケートで CAN-C を使用することによって当事者のニーズと支援者から見たニーズには差があることに改めて気づくことができたとの記載から、尺度としてのみでなく当事者の支援を意識した支援の視点を持つことへ働きかけることができる可能性もあることが考えられた。尺度としての十分な信頼性妥当性については今後も検討する必要があるが、アセスメントの視点を当事者と支援者で共通認識でき、当事者の主体性が支援に活かされるツールのひとつとして支援に活用できると考えられる。